

## 第 11 話 北條氏の滅亡

ご だい ご せんじょうざん あんざいしよ ふる お  
 後醍醐天皇の隠岐脱出、船上山の行在所、諸国に官軍が奮い起こる。  
 あしがたかうじ きじゆん おちい につたよしさだ ぎへい あ おとしい  
 足利尊氏が帰順して、六波羅が陥り、新田義貞が義兵を挙げて、鎌倉を陥れる。

### 天皇の隠岐御脱出

こうして勤王の軍が諸方に起こったので、幕府は特に隠岐の守護佐々木清隆に命じて、ますます嚴重  
 ご だい ご けいご すで だいたうのみや ぎよせん ほうこく き  
 に後醍醐天皇を警護させた。けれども、天皇は既に大塔宮からしばしば漁船にことづけてのご報告を聞  
 きんのうぐん ようす しょうち いっこく はや しまぬ で きかい うかが  
 かれて、勤王軍の様子をもご承知になっていたのも、今はただ一刻も早くこの島を抜け出る機会をと窺  
 っておられた。そのところに、警固の武士の中にも、ひそかに天皇に心を寄せる者が出て来たので、つ  
 いに元弘 3 年閏 2 月 24 日、まだ夜の明ける前に、六條忠顕のお供で、ひそかに行在所を拔出られた。  
 しの とほ ようや ちぶり ほうき しょうにんせん の  
 忍びのご徒歩で漸く千波の港までお出になり、たまたま伯耆に帰る商人船のいたのにお乗りになった。

### 乾魚の俵

夜もすでに明けはなれると、御船は港の外に漕ぎ出した。折からの順風に帆をあげ、やがて海上  
 す おんふね こ だ おり じゆんぼう ほ  
 80 ~120 km も過ぎたと思うころに、うしろを見ると、同じ追い風に帆を懸けた船が十艘ばかり、矢を射  
 は さ さ ききよたか お ふね せんどう ただあき ふなぞこふか かく  
 るように馳せて来る。佐々木清高が天皇を追う船である。船頭は、天皇と忠顕とを船底深くお隠し  
 ほしうを たわら つ そし おって おいつ  
 申して、その上に乾魚の俵を積んで、素知らぬ顔をして船を進めていた。間もなく追手の船は追付いて、  
 ご ざふね のりうつ さが  
 御座船に乗移ると、ここかしこと搜した。

しかしついに見出せず、「さてはこの船においでではなかった。もしや怪しい船は通らなかったか？」  
 たづ け さ ちぶり かんむり  
 と尋ねるので、船頭は、「そういえば、今朝まだ暗いところに千波の港を出た船にこそ、都の人と見えて、冠  
 つ たてえぼし つ  
 とやらを着けた人と、立烏帽子を着けた人と、2 人乗っておられましたが、その船はもう 4, 5 里 (20 km)  
 お そうい さ  
 も先へ行って居りましょう」というと、さてはその船に相違ない、急げ、いそげとて、一さんに東を指し  
 こ さ  
 て漕ぎ去った、

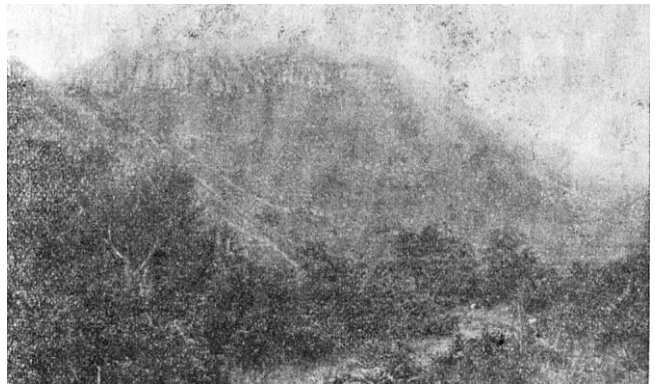
### 名和長年

天皇は危ういところを遁れられ、御船は間もなく伯耆の名和の港に着いた。予ねてこの地の地頭の  
 あや のが ほうき なわ みなと つ か ちとう  
 名和長年という者が、家も富み、一族も多く、武勇にもすぐれている事をお聞きになっておられたので、則  
 な わながとし と ぶゆう すなわ  
 ち六條忠顕を勅使としてその家に遣わしになり、「主上が隠岐を遁れて、只今、この地にお着きにな  
 ろくじょうただあき ちやくし つか しゅじょう おき のが つ  
 ったが、深く長年をお頼みなさろうとの仰せである。頼まれるか否か、速やかにご返事を申上げよ」と伝  
 ふか ながとし たの おお いな すみ へんじ もうしあ つた  
 えられた。片田舎の一地頭にしか過ぎない長年が、一天万乗の君から直接にお頼まれたのです。  
 かたいなか ちとう す ながとし いってんぼんじょう きみ ちやくせつ たの  
 彼はいかにこの恩命を光栄に感じたことでしょう。遙かに座を下がって、涙を流して謹んで仰せを  
 おんめい こうえい はるか ざ さ つつし おお  
 承ると、直ぐに一族を集めてこれを告げた。誰も彼もが感奮した。  
 うけたまわ だれ かれ かんぶん

## 第11話 北條氏の滅亡

### せんじょうさん あんざいしよ 船上山の行在所

ながとし おんふね むか ふ きん  
長年は急いで天皇を御船からお迎えし、附近の  
ようがい せんじょうさん あん  
要害というべき船上山にお入れして、そこを行  
ざいしよ さつきゅう ようい  
在所としたが、もとより早急の事で、十分の用意を  
いとま くら こめ  
している 違とてなかったの、先づ自分の倉の米  
ひょうろう ざいさん  
を全部その山に運ばせて兵糧とし、家の財産や何  
ことごと あた やかた  
かは 悉く人々に与えて、わが館には火をかけて  
けっし かくご た こ  
焼き払い、全く決死の覚悟でこの山に立て籠もって、  
まも  
行在所をお守りする事にした。



ほうき せんじょうさん  
伯耆国（鳥取県） 船上山

ぐんぜい わづ な わしちろう はかりごと しるぬの たん  
その軍勢は僅かに 150 騎に過ぎなかったが、一族の名和七郎という者の 謀 で、白布が 500 反あ  
はた まつ は けむり きんごく もん さんじょう  
ったのを旗にこしらえて、松の葉を焼いてその 煙 にふすべ、近国の武士の家々の紋を書いて、山上のあ  
たすう はた みね あらし ふ ひるがえ むすう  
ちらちらに立てまわした。 この多数の旗が峯の 嵐 に吹かれてぱたぱたと 翻 り、山中には無数の兵  
み  
が充ちているように見えた。

### ぞくしょう はいそう 賊将の敗走

さ さ ききよたか  
一方、佐々木清高は、その勢 3,000 騎を率いて間もなくこの山に押し寄せたが、山の中 腹まで攻上っ  
じょうちゅう  
て 城 中 をきつと見上げると、家々の旗が 4~500 旒、日に映じてひらひらと 翻 っている。 さては近  
ごく  
国の武士共が早くも馳参ったと見えると思うと、部下の兵らは初めから怖気がついてはかばかしく進むこ  
い わ なが や め いぬ  
とも出来ずにいる。 一人の大將はどこから射たとも分からない流れ矢に眼を射抜かれて死に、今一人の  
にわか はた ま ひき こうさん きよたか せ やぶ から  
大將は、俄かに旗を巻いて、800 余騎を率いて降参してしまったので、清高はさんざんに攻め破られ、辛  
そう こぶね の おき に かえ しまびと にく じょうりく  
くも 1 艘の小船に乗って隠岐へ逃げ帰った。 しかし、島人らは彼を憎んで上 陸させなかったの、よ  
ふね なみ まか えちぜん つる が ただよ つ ろくはら に こ  
んどころなく舟を波に任せて、越前の敦賀に漂 いて着いて、京都の六波羅に逃げ込みました。

### きんのう ぶ し 勤王の武士あつまる

ごかんこう せんじょうさん ききつた  
さて天皇が御還幸になって、天皇は船上山においてということを知ると、諸国の武士らは、  
ほうき いづも いなば もちろん いわみ あき みまさか びんご びちゅう びぜん  
伯耆、出雲、因幡の近国は勿論、石見、安芸、美作、備後、備中、備前から四国、九州の方からまでも、  
はせまい いあま ふもと  
われ先にと馳参ったので、間もなく船上山には兵が居余って、四方の 麓 10 kmの間は、木の下、草の蔭  
ほど ありさま  
までも人でない所はないという程の有様となった。

ごかんこう じゅんぴ ろくじょうただあき せいばつ ただあき  
それで天皇は、京都に御還幸の準備として、先づ六 條 忠顕に六波羅の征伐をお命じになり、忠顕は  
元弘 3 年 3 月 15 日、30,000 の兵を率いて京都に向った。

### あかまつのりむら しんげき 赤松則村の京都進撃

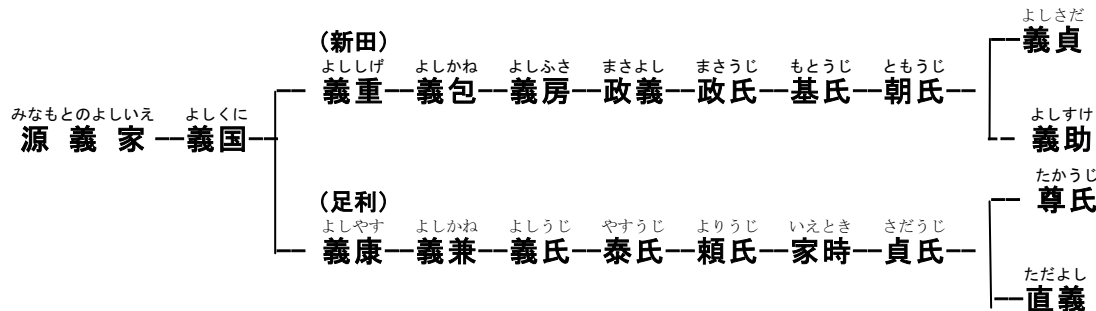
はりま お あかまつのりむら ぐんぜい たたか  
これより先き、播磨に起こった赤松則村は、山陽道から進んでしばしば六波羅の軍勢と 戦 い、3 月  
しちゅう しんにゅう ただ すこぶ こぜい  
12 日には既に京都の市中にまで侵入した。 但し、この時、彼の軍は 頗る小勢であったのに、敵は数  
げきたい やまざき ひ かえ じん やまさき やはた りょうち  
十倍の大軍でしたから、ついに撃退されて山崎まで引き返したが、その後も彼は陣を山崎、八幡の 両 地

# 第11話 北條氏の滅亡

は <sup>さいごく</sup> 西国の通路を <sup>つうろ</sup> 遮り、しばしば兵を出して京都を <sup>おびや</sup> 脅かしていた。

## 六條忠顯

この赤松の軍勢だけをも、六波羅では全く打ち破ることが出来ずに困っているところに、今度、更に六條忠顯が山陰道から攻上って来ると聞いて、六波羅はいよいよ驚いた。河内の千早城は既に3ヶ月にもなるのに未だに落ちそうな様子もなく、此の上、若し六波羅が危急に迫るような事でもあったら、それこそ大変であるというので、しきりに早馬を飛ばして鎌倉に注進すると、さすがの高時も大いに驚き、さらば重ねて大軍を送って、あべこべに船上山を攻める事にしようと、即ち名越高家、及び足利高氏を討手の大将として出陣させた。



## 足利高氏

この時、足利高氏は病気をした後がまだ十分に癒っていなかったのに、たびたびの催促で、無理に出発せられたので深くこれを憤ったといわれる。元来、高氏は、自分が源氏の子孫でありながら、源氏の家来の北條氏に仕えていることは久しく快く思っていなかったところへ、曩には父の貞氏が没して、その喪中であるにも拘らず、笠置の行在所を攻めんがために向わせられ、今又、病中を強いて出発せられたので、いよいよ高時のわが儘を深く心中に怨んだのでした。

## 足利高氏の帰順

元弘3年3月27日、足利高氏は弟の直義と共に、吉良、上杉、仁木、細川、今川、荒川以下の一族郎等の一切を率いて、その勢3,000余騎で鎌倉を出発した。この時には既に、北條氏を倒して源氏を再興しようという決心を抱いていたので、4月上旬、三河の矢矧に着くと、先づ、密かに使いを船上山に送って、お身方に参るべき由を申し上げさせた。近江の鏡宿まで行った時に、彼はその使いの者らが伯耆から帰って来るのに出遭い、天皇のありがたき思し召しを承ったのですが、そんな風は少しも見せずに、4月16日に京都に入った。



あしかがたかうじ 足利尊氏

両六波羅や名越高家らといろいろ評議の末に、高家は7,600余騎を率いて山陽道から播磨、備前を経

て伯耆(鳥取県西部)に向かい、自分は五千余騎を率いて山陰道から伯耆へ向かうということにして、4月27日には丹波の篠村まで進んだ。

高氏の下心

ところが、山陽道に向った名越高家は、その同じ27日に山崎の赤松則村と戦って脆くも敗れて戦死しました。高氏はこれを聞くと、乃ち兵を篠村八幡の社前に集めて、帰順の事を始めて一同に告げ知らせた上、自ら八幡の神前に願文を進めて武運の長久を祈り、ここに義兵を挙げて官軍に応ずることとなったのですが、それと同時に、諸国の源氏に密使を送って、伯耆の勅命を伝えて兵を募った。この密書は極めて小さな紙又は絹の片に書かれたもので、大きなもので方3,4寸、小さなものは一辺が1寸(3cm)のものさえあった。殆ど全国に向かって発せられたのでして、その文言は、「伯耆の国から勅命を蒙って、今度、義兵を挙げるに就いては、共に力を合わせて欲しい」という意味で、密使はこれを髻又は衣服の縫い目に封じ込んで行ったのです。彼が自ら源氏の棟梁として大いに兵を集め、北條氏に代わって天下を取ろうとした下心は、既にこの時から明らかであったとも見られます。

さて、足利高氏は丹波(兵庫県北部)に在って、暫く兵力を集めていたが、元弘3年5月7日、その数20,000余騎を率いて京都に向った。この時赤松則村は山崎から、六條忠顕は伏見の方向から軍を進めて、3方から六波羅を攻撃する手筈にしたのです。

六波羅の陥落

六波羅では、60,000余騎を3手に分けて3方へ向わせ、大いに防戦に力めたけれども、既に力と頼んだ名越高家を失い、足利高氏は却って敵となって攻寄せて来たのですから、初めから士卒の意気が揚がらなかった。ついに3方とも攻め破られて、今は逆も京都では防ぎようがなくなったので、六波羅探題の北條仲時と北條時益とは、ともかくも一旦京都を落ちて、関東の援兵を待ち、千早城の寄手も召返して、再び京都を回復することにしようと、5月7日の夜半に、光厳院並びに後伏見、花園の2上皇以下の皇族を奉じて近江に逃げた。

北條時益はその途中で流れ矢に中って死し、北條仲時は近江の番場まで行った時に、官軍の一隊が行く手を塞いでいるのに出会って、部下の430余人と共に腹を切って死んだ。曩に隠岐から遁れて来ていた佐々木清高もこの時いっしょに死んだ。実に元弘3年5月8日の事で、今も当時の哀れを物語る300基の墓石が、その地の八葉山蓮華寺という時宗の寺の山内に並んでいる。

光厳院並びに2上皇以下の皇族は、その翌10日に、官軍に守護されて息吹山の太平護国寺に入れられたが、更に数日の後に京都に還御された。

こうして幕府の出張所というべき六波羅は全く滅んで、京都は完全に官軍の手に帰したのです。忠顕、高氏、則村らはおのおの早馬を立てて、これを船上山に奏聞しました。後醍醐天皇はさぞ御満足におぼしめしたでしょう。

千早の囲みが解ける

## 第 11 話 北條氏の滅亡

この時までも、金剛山の千早城には、なお 100,000 近くの鎌倉勢が取り囲んでいましたが、5 月 8 日の午頃に、前夜に六波羅が攻め落とされたという事が伝えられると、賊兵共は全く呆れて、さらば一刻も早く引き上げようと、忽ち囲みを解いて立ち去った。長い間の籠城に、苦戦に苦戦を重ねた甲斐があつて、六波羅陥落の知らせを得た時の楠木正成の喜びはどんなでたでしょう。

### 新田義貞

六波羅の陥つた翌日、即ち元弘 3 年 5 月 8 日、新田義貞は義兵を上野（群馬県）に挙げた。新田氏は足利氏と同じく源氏の子孫で、義貞は源義家の 10 世の孫です。前に掲げた系図でも分かる通り、始めて新田氏を名乗った義重は義国の長子で、始めて足利氏を名乗った義兼の兄なのですが、源頼朝が兵を挙げた時に、直ぐにその召しに応じなかったのが、頼朝の不興を受けて、北條氏の時代になつても、その子孫は常に不遇の地位に立たされていたのです。

### 新田氏と足利氏

ところが、足利氏は、先祖の義兼が頼朝と共に北條時政の娘を娶つて北條氏と姻戚の関係を結んだのみならず、その子の義氏も孫の泰氏も、皆北條氏の娘を娶つたので、源氏が亡びた後も北條氏から特に優遇されて、いつか同族の新田氏などは比べものにならないほどに声望が高くなりました。

けれども、新田氏の一族も、上野、越後等の各地に拡がって相当の勢力を占めていたので、機会があつたら、大いに家運を復興しようとは考えていたでしょう。

### 新田義貞の自覚

元弘 3 年正月、執権北條高時が大兵を發して正成を千早城に囲ませた時に、新田義貞も寄手の軍に加わっていたが、城が容易に陥らないのみならず、次第に諸方に義兵の起こるのを見て、ある日、彼は重臣の一人を近づけて言いました。「昔から源平の両氏は朝廷に仕えて、平家が世を乱す時は源氏がこれを鎮め、源氏が無法を働く時は、平家がこれを治める。義貞、不肖なりといえども、源氏の一族として名のある家に生まれている。然るに、今、執権高時の行いを見るに、臣下としての本分を忘れて、無道を極めている。もはや滅亡も遠くあるまい。今、われは本国に帰つて義兵を挙げ、彼を討つて、天皇の御心を休め奉らうと思う」と。乃ち使いを以つて大塔宮の令旨を乞い受けさせると、病と称して急いで本国に帰り、密かにその準備を整えていたのです。

### 新田義貞の旗揚げ

さて、元弘 3 年 5 月 8 日の早朝、新田義貞が上野国新田郡の生品明神の神前で旗を挙げた時には、弟義助以下の一族郎等は、すべて百五十騎に過ぎなかったが、その日の夕方には越後の国の一族がまづ二千騎を率いて馳せ加わり、つづいて後陣の越後勢並びに甲斐、信濃の源氏が馳せ加わつて、間もなく八千騎となった。更に進んで武蔵に入ると、上野、下野、上総、常陸、武蔵などの兵らが陸続と馳せ集まつて、非常な大軍となった。ある書物にはその勢 207,000 余騎と記されている。義貞はこの大兵を

第11話 北條氏の滅亡

ひき めざ  
率いて、鎌倉を目指して進んだ。

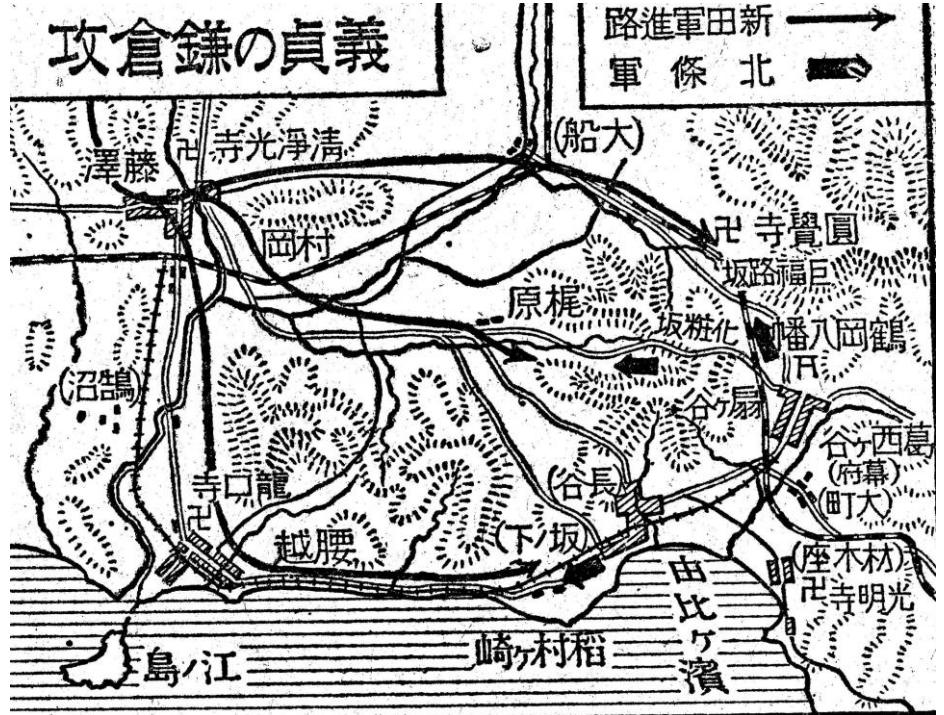
かまくら きょうがく  
鎌倉の驚愕

戦争は遠い京都の方の事とばかり思っていた鎌倉では、これを知って非常に驚いた。あわてて軍議を開いて10日には金沢貞将、桜田貞国等に110,000余騎の大兵を率いて進発させて、新田義貞の軍を武蔵の入間川附近に迎え撃たせたが、戦う毎に敗れたので、執権高時は更に弟の泰家を大将として、重ねて100,000余騎を以ってこれを援けさせた。

それで、5月15日には、武蔵の国府—今の府中市—の附近の分倍河原で両軍の大決戦が行われたが、この時、北條氏の軍は全く敗れ、辛うじて鎌倉に引き上げた。

かまくら ぜ  
鎌倉攻め

にっ た よしさだ はちく いきお  
新田義貞は破竹の勢いを以って追撃して、藤沢まで行った時に、全軍を3手に分けて更に3方から鎌倉に迫った。



すなわ うよく おおだてむねうじ  
即ち右翼軍は大館宗氏を大将として極楽寺の切通しに向かい、義貞と弟の義助とは中央軍を率いて化粧坂に向ったのです。

鎌倉方でも亦、3方に兵を分けて、これを防いだ。即ち大佛貞直らは50,000騎を以って極楽寺口を塞ぎ、赤橋守時らは60,000騎を以って洲崎に向かい、金沢貞道は30,000余騎を以って化粧坂を堅めました。

合戦は18日の朝の8時ごろから始まりましたが、北條氏の軍もよく防いだので、勝負は容易に決しなかった。中でも最も激戦を極めたのは洲崎口で、1日1夜の間65度までも突撃戦が行われたということです。ついに賊将の赤橋守時は自殺し、部下の兵も多くは腹を切って死んだので、この方面が真っ先に破れて、新田氏の軍は山の内まで進入しました。

いなむら さき  
稲村ヶ崎

ごくらくじぐち おさらぎさだなおほんま やましろの さえもん たいごう もの おおだてむねうじ  
しかし、極楽寺口では、賊将大佛貞直の家来の本間山城左衛門という大剛の者に大将の大館宗氏が討たれて、その軍勢は遥かに片瀬、腰越の辺までも引き退いた。新田義貞はこれを聞くと、自ら20,000騎の精兵を率いて、片瀬、腰越をまわり、21日の夜半に極楽寺坂に出た。月の光で敵の陣を見ると、この地は、北は切通しで山が高く、路が険しいのに、木戸を構え、楯を搔いて、数万の兵が陣を並



## 第11話 北條氏の滅亡

べている。南は稲村ヶ崎で、海水が岸を洗い、殆ど通れるほどの路もないのに、浪打際まで逆茂木を  
しげ ひっか おき 繁く引掛け、その上、沖には4~500 m ほどの所に大きな船を並べて、矢倉を搔いて横矢を射させようと  
ま かま 待ち構えている。



鎌倉

新田義貞、稲村ヶ崎で刀を投じる

### 新田義貞、海神に祈る

なるほど、これではこの陣の寄手が追い払われて退いたのも尤もだと思ったので、義貞は馬から下  
りて、冑を脱いで海上をはるばると伏拝み、海神に向って、「義貞は今、臣下としての道を尽くさんが  
ために、義兵を起こして敵陣を攻めようとしているのです。どうぞ義貞の忠義に免じて、潮を退け、  
道を開いて下さいませ」と熱心に祈って、腰に佩びていた黄金作りの太刀を取って、海中に投げた。

### 鎌倉の陥落

そのためでしたか、間もなくこれまで嘗て干渉のなかった稲村ヶ崎が、俄かに2 km 以上も干上が  
って、砂地となり、横矢を射ようと構えていた賊の兵船も、落行く潮に誘われて遥かの沖に漂った。義  
貞は大いに喜び、大軍を率いてその干潟を真一文字に掛け通って、鎌倉に攻入った。この思いがけない  
所からの攻撃に賊軍は驚いて総崩れとなり、はかばかしい軍も出来ずにいるところに、更に方々から  
火を放って、山の内、化粧坂の方面からも攻込んだので、ついに鎌倉勢は全く敗れた。執権北條高時は  
火を放って、幕府の館を焼いて、一族郎従870余人と共に、北條氏の菩提寺である葛西ヶ谷の東勝  
寺に退いて自殺した。時に高時は31才でした。彼が暗愚で、悪い政治を行い、人望を失ってい

## 第11話 北條氏の滅亡

たにも拘かかわらず、この時一緒に自殺した者が870余人もあったのは、代々北條氏の恩を受けて、主人のためには、善悪を問わず命いのちを捨てるという武士道ぶしどうを守った者が多かったのでありましょう。

### 北條氏の滅亡

こうして、長らく幕府の執権として天下の政治をしていた北條氏は、元弘3年5月22日を以って滅び、最後の将軍であった守邦親王もりくにしんのう --- 後深草天皇のお孫ごふかくさ --- も職を罷めて坊さんになられたので、ここに鎌倉幕府は無くなった。 実に西暦1192年 -- 後鳥羽天皇の建久3年 -- に頼朝が将軍に任ぜられて、幕府を開いた時から142年目でありました。

また、九州探題の北條英時は、同じ5月の25日に、少式貞経、大友貞宗らの官軍に押寄せられて博多で自殺し、長門探題の北條時直は、その翌26日に、降参して出たので、西国の北條氏も一時に滅んで、ここに全国は全く平定したのです。

( 第11話 北條氏の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、第12話 建武の中興 へ )